



心を揺さぶる名作・感動教材

道徳教材として長く読み継がれてきた名作や、大人も思わずほろりとくるような胸にしみる物語は、生徒の心を揺さぶり、より深い道徳的思考へと導きます。あかつきは、多くの実践に裏打ちされた名作教材や感動教材を大切にしています。

12 ひまわり
54



「麻衣ちゃん、麻衣ちゃん……」
誰かが私を呼んでいます。ずっとずっと呼んでいます。
「ハイ、なあに」
「答えよと」生懸命、口を開くのですが、なぜか声が出ないのです。
「どうしたんだろう？」
そう思ってみても、いつの間にかまた、聞こえなくなっ……。目を
開けようと思ってもまぶたが重く……。

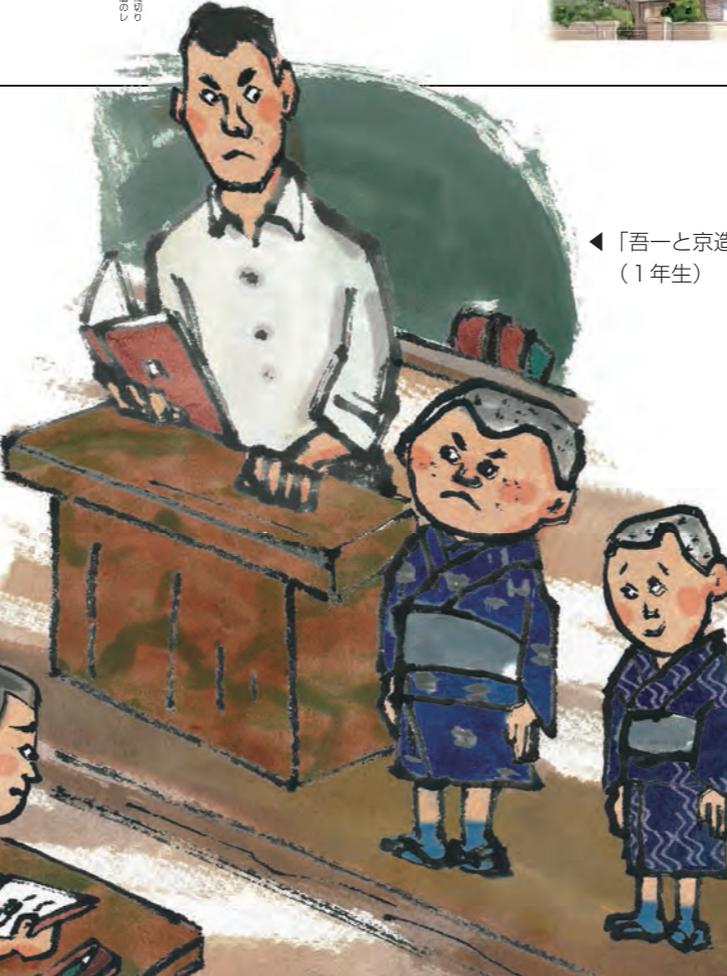
私は、人は助けあって生きていけると思いた
す。どんなに力のない人でも、必ず誰か
を助けていると思えます。
例えば、一人の人が、誰かに語りかけるだ
けでも、誰かを助けているのだと思いた
です。その人が語りかけるまで、苦しむ感じ
だりします。

ある日、どうにかまぶたが開きました。そばには母がいて、「麻衣、麻衣」って言いながら泣
いていました。私、手術を受けた日から一か月も間、植物状態のようになっていたらしいです。
そんな私のそばで、母は毎日、麻衣が目を開けてくれますよにと祈っていたと言います。
私は中学三年生のとき、頭の病気がかり手術を受けました。それまでは普通の子どもと同じで、
毎日楽しく学校へ行き、プラスバンド部で活躍していたのです。元気がいっぱい、病氣なんかそ
うもない子でした。
日差しが強いと感じ始める頃、目が覚めるとやたらに頭が痛く、吐き気がするのです。
ものが二重に見えたりもします。母は、学校へ行くのが嫌なのかとか、甘えているのか
とか思っていたようですが、あまりに私が痛がるものだからわざと大きな病院へ連れていか
れたのです。
病院の生もなかなかならなくて、私がどんなふうにも「健康そうに見えるけ
どね」と笑い顔で聞いてきます。やがて、CT検査をしてくれ、大変な病氣だということに気が
つくりました。即入院ということになり、翌日には手術を受けたのでした。私自身は手術は怖
くもなくて、徐々に手術室へ入りましたが、本当はとも危険な状態で手術に十四時間ほど
かかりました。そして、その日を境に私の人生は大きく変わってしまいました。
やがて意識が戻ったものの、私は障がい者になっていました。歩くことも、上手に話すことも
できないのです。看護士さんに介助してもらわなければいけないのです。恥ずかしくて恥ずかし
くてたまらないのですが、自分でトイレに行きたいのにも分らなくなっていました。とき
どきけいれんも起ります。手や体がふるふる震えたりして、止まらないうつ。
ある日、母に頼んで鏡を見ました。髪は薄く、地肌が見えています。何か言おうとする口が
引きつり、顔はゆがんでいます。それが私でした。私は気が狂いそうでした。
手術室に入るまではなんでもなかったのに、手術室を出た途端障がい者になってしまったので



▲「ひまわり」(3年生)

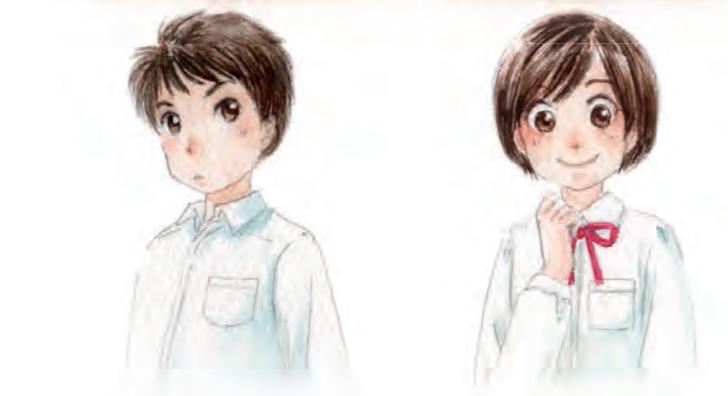




▲「吾一と京造」(1年生)

▲「人間であることの美しさ」(2年生)

第3学年	第2学年	第1学年
卒業文集最後の二行 月明かりで見送った夜汽車 二人の弟子 元さんと二通の手紙 風に立つライオン	ネパールのビール 人間であることの美しさ 最後の年越しそば 一冊のノート 足袋の季節	美しい母の顔 吾一と京造 銀色のシャープペンシル 語りかける目 ふたりの子供たちへ
スダチの苗木 ライバル 誰かのために 母と子のロードレース ひまわり	燃え盛る炎 天使の舞い降りた朝 明かりの下の燭台 尊い玉子 地図のある手紙	裏庭のできごと いつわりのバイオリン アイツ 夜のくだもの屋 加山さんの願い
など	など	など



▲「アイツ」シリーズ(1~3年生)